

本田良行先生を偲んで

千葉大学大学院医学研究院自律機能生理学

福田康一郎

千葉大学大学院医学研究院麻酔学

西野 卓

奈良県立医科大学第2内科学

木村 弘

日本生理学会特別員、千葉大学名誉教授本田良行先生には、去る平成15年8月1日（土）、ご自宅にて急逝されました。享年77歳でした。先生のご遺志とご家族のご希望で葬儀、告別式ともご親族のみにて執り行われました。

本田先生は、大正15年6月、富山県砺波市にご誕生になり、昭和20年には旧海軍兵学校を卒業されました。終戦後の混乱の中、価値観の極端な変化に辛苦されましたが、翻然大悟されて旧制金沢医科大学（現金沢大学医学部）に進まれ、昭和25年同大学を卒業されました。昭和26年には金沢大学医学部附属病院でインターンを修了され、石川県厚生農業組合連合会加賀東病院に勤務された後、昭和28年金沢大学医学部助手（生理学講座、主任斎藤幸一郎教授）となり、血液の酸塩基平衡と呼吸調節に関する研究を開始されました。昭和31年には金沢大学医学部助教授（生理学）に昇任され、昭和37年から39年まで呼吸調節の研究のためオランダ・ナイメーゲン大学生理学教室クロイツァー教授のもとに留学されました。昭和49年には千葉大学教授（医学部）に昇任され、以来平成4年3月に千葉大学を定年退官されるまでの18年間にわたり、千葉大学医学部生理学第2講座（現自律機能生理学分野）を担当され、生理学の教育、研究と後進の育成に多大の功績をあげられました。

先生は我が国では従来未開拓の分野であったヒトの呼吸調節を主な研究テーマとして取り組まれ



ました。過去に気管支喘息治療のために千葉大学で行われた頸動脈小体摘出患者の呼吸機能を千葉大学肺癌研究施設および米国の研究者と共同研究され、低酸素に対する換気反応が減弱しているばかりでなく、運動時の換気充進も低下していることを世界で始めて報告されました。また、先生は米国カリフォルニア大学、ドイツ・ルール大学、英国・オックスフォード大学等との多数の国際共同研究を遂行されました。多くの諸外国の呼吸生理学者は、自らヒトにおける実験の被験者になることが通例ですが、先生も若い研究者のために実験回路を設計し、率先して被験者となり範を示しておられました。平成3年には国際的な呼吸

生理学者の集いであるオックスフォードカンファレンス（呼吸調節とその理論モデルについての国際会議）第5回大会を日本において主催されました。先生は多数の原著英文論文を外国誌に発表されており、また、著書として「酸塩基平衡の基礎と臨床I, II（編集・分担）」、「臨床呼吸生理学I, II（編集・分担）」、「肺と心機能の基礎と臨床I, II（編集・分担）」、「現代の生理学（編集・分担）」、「新生理科学体系 17 呼吸の生理学（編集・分担）」等が有名であります。

千葉大学においては、昭和40年代後半からの大学紛争時には苦勞の多い学生との直接の対応に尽力されました。その後、千葉大学動物実験施設長、千葉大学評議員、千葉大学附属図書館支鼻分館長をつとめられました。日本生理学会にあっては、常任幹事、欧文機関誌 Japanese Journal of Physiology の呼吸生理学分野の編集委員、同編集委員長の重責を担われ、同誌の国際誌としての発展に多大の尽力をされました。昭和63年には本間三郎千葉大学名誉教授とともに当番幹事として第64回日本生理学会大会を主催されました。先生は米国生理学会および英国生理学会の会員も務められており、日本を代表する呼吸生理学者として国際的にも高く評価されておられました。

定年退官後、永年のご業績に対して千葉大学名誉教授の称号を授与されました。また、平成11年には日本生理学会の特別会員に推挙されました。ご退官後も広く基礎・臨床の呼吸生理学・応用生理学の分野で後進の育成ならびに生理学の教育・研究の指導に熱意をもって邁進されておられました。ご逝去の直前まで呼吸生理の実験準備とオックスフォードカンファレンスへ出席のため発表の準備をされておられました。先生のヒトの呼吸生理、とくに呼吸調節機序解明への興味は尽き

ることなく、最後まで研究者としての情熱を注がれておられました。

先生が研究生活を開始された頃、貧しい研究環境の中で手作りのガラス電極を用いてはじめて動脈血 pH の連続測定に成功され、その時の強い印象から続いている研究生活の道程の一部を定年退官時の英文業績集：Regulation of Blood Gas and Ventilation-Collected Papers of Dr. Y. Honda (1957-1992) に次のようにまとめておられます。

My interest in respiratory physiology originated with the observation of the continuous recording of arterial pH. Although this was done by using a poor-looking setup consisting of a homemade glass electrode and other junk in the laboratory, I was strongly impressed by its dynamic profile in concert with the breath-by-breath change of respiratory activity. Initial application of the continuous pH recording was to detect the primary effects of hypoxia and hypercapnia which inevitably elicited arterial pH change accompanying secondary alteration in ventilation. We kept arterial pH constant by infusion of acid or alkali, so that the primary effect of blood gas, i.e., PO₂ and PCO₂ were successfully evaluated. Further studies on the control of blood gas and acid-base equilibrium were conducted as one of the lifelong research project in the department.

ここに本田良行先生が歩まれた呼吸生理学研究者としての足跡に心からの敬意を表すとともに、ご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なお、諸外国の研究者からも多くの弔意が寄せられましたことをご報告申し上げます。